# 読書と知的環境

「週末寸言」原稿 20110702

外電によれば、米国のオンライン書店アマゾン社は、全米の人口１０万人以上の都市を対象に、今年１月以降１人当たり本の購入額の多い２０都市を選定したそうだ。

それによれば、１位はハーバード大学やマサチューセッツ工科大学のあるケンブリッジ。ここでは特にノンフィクション本の売り上げを中心に全米１位だったとのこと。また、やはりトップ級大学であるカリフォルニア州立大学のあるバークリーやミシガン州立大学のイーストランシングなどがそれぞれ２位、３位に入っている。

この記事、「ああそうですか」と言ってしまえばそれまでだが、やっぱり気になる。データは人口一人当たりの数値で表しているのだから、都市の規模には無縁の筈。つまり、本の購読とはそこに住む市民一人一人の知的作業の証拠ということだろう。知的レベルの高さと本の購買量とが無縁ではないことをアマゾンのこのデータは表しているに違いない。

日本ではこの種の調査は前例がないが、ぜひ知りたいものだ。甲府市などがどうなっているか大いに興味がある。

実は、日本の出版事情は寒心にたえない状況になっている。出版点数は増えているのだが、売り上げが激減し２兆円市場が今や大台を割り、その質的低下もささやかれている。特に若者の読書量の減少が売り上げ減少に響いていると言われている。

上記外電から教訓を探せば、知的活動の活発さと読書は相関するということだろう。若者が読書離れしているということは、若者の知的活動の衰弱と無縁ではないことになる。これは未来に向かって困ったことと言わなくてはならない。

なお、上記報道によれば、「寝そべりながら読書しやすいビーチがあるフロリダ州マイアミなど」もランキング上位集団の中にあるそうだ。ゆっくりと浜辺でロッキングチェアに肘をついて読書に時間を過ごす豊かな人生の残照時間が記事の行間から見えてくる。これにひきかえ、専ら病院の待合室で時間をつぶしている日本の老人との質的差も見えてきてさみしくなる。